県展賞作品講評

洋画部門

赤い円・青い三角形　　浦辺　義雄（湯梨浜町）

県展賞において抽象的な表現が優勢であったことは初めてではないだろうか。他の二点が一つの単位の緊密で単純な反復によって特徴づけられるのに対して、この作品は独特の形態がおりなす不思議な浮遊感にあふれている。幾何学的なイメージが点在する中に、人や樹木を連想させる有機的なイメージが配置され、あいまいな地と像の関係を結ぶ。色彩もにぎやかで楽しい。ねじれ、回転するイメージによって画面には躍動感が生まれ、かたちと色のおもちゃ箱をひっくり返したような楽しさがある。独特の浮遊感から私はカンディンスキーの後期の作品を連想した。タイトルにその影響を認めるのは深読みに過ぎようか。今回、これら、全くタイプの異なる抽象絵画が県展賞を受賞したことは、比較的なじみの薄い抽象表現の多様な可能性を理解するうえで一つのよいきっかけとなるのではなかろうか。

（講評者　尾﨑　信一郎）

洋画部門

雨のイスタンブール 木村　広美・玉井　詞（米子市）

長時間の集中によって描かれたことが想像される緻密極まりない作品である。紙の上に色鉛筆とカラーペンによって円を描くように無数のドットがうがたれ、無数の同心円が矩形の画面を満たす。視線は一方で細密なドットの中に引き込まれ、一方でそれらを横断して画面全体へと向かう。画面が無数の点＝筆触に分割される形式からは、スーラやシニャックらの点描絵画も連想されようが、近似した大きさの同心円がオールオーバーに広がる画面には具体的な形象は存在しない。このようなイメージはどこから発想されたか。ヒントとなるのは題名であり、この作品が雨の日のイスタンブールと関係するならば、ここに描かれたのは水面に広がる水紋と考えられないか。したがってこの作品においては本来水平的なイメージが、あたかも周囲の風景を反映するがごとく、さまざまな色を放ちながら垂直に広がっているのである。

（講評者　尾﨑　信一郎）

洋画部門

白磁色についた痕跡　　金田　茉夕

さほど大きくはないが、圧倒的な存在感によって洋画部門の審査において最高得点を得た作品である。白く何層にも下塗りされた板の上に白く小さな矩形がおそらくは面相筆を用いて無数に重ねられている。その反復の徹底性に見る者は驚嘆する。

シンプルな構成は美術史に多くの参照項をもつ。白の上に白という構成からはマレーヴィッチ、同じ単位の反復からはローマン・オパルカ、もし反復が網状であれば直ちに草間彌生のネット・ペインティングが連想されるだろう。

私たちは作品に近接して小さな矩形の連なりを確認し、少し離れてこのような連なりが全面に及ぶことを確認する。硬く塗りこめられた地とその上に描かれた四角い形状の間には微妙な揺らぎが発生し、一種錯視的な効果を与える。白という色彩、矩形という形態、絵画にとって最も基本的な色と形が惹起する思いがけない体験からは、「最も単純なものこそ最も豊かである」という逆説を証明するかのようだ。

（講評者　尾﨑　信一郎）

日本画部門

残響　　菊池　敏（米子市）

紅く色づきはじめた森の中、ヘッドフォンから聞こえる音に耳を澄ませているように見える一人の若者。いやヘッドフォンではなく、防音イヤーマフなのか。タイトルは《残響》とある。後者なのだとすれば、歩いてきた小径の葉擦れの音や、カサカサと落ち葉を踏みしめてきた自身の足音を、自分だけの静寂の中で反芻し、秋の音を身体に浸み込ませようとしているようでもある。大画面を活かす高い構成力でつくられたメリハリある画面は、観る者をひき込み、そうした想像を豊かにさせる力を放っていた。

巧みな線と陰影で表された人物は強い求心力を持ち、その緻密な筆と柔らかな色とは対照的に、後ろの大樹の箔づかいは、画面の質感を効果的に拾いながらエッジを際立たせ、大胆で清冽な印象を加えている。緑から朱色へと溶け合うような葉むらの表現は、画面全体の調和をもたらしている。主題に新鮮さがあり、表現力、色彩感覚に優れた、県展賞にふさわしい作品である。

（講評者　横浜美術館 主任学芸員　内山　淳子）

版画部門

立夏　　木村　正明（境港市）

タイトルにふさわしく、季節特有の自然の鮮やかさが巧みにとらえられた作品である。作者は昨年も県展賞を受賞しており、前作でも効果的に用いられていた木版画特有の陰刻法による摺り重ねが今回も目を引く。ただし、構図と色彩の印象は前作と対照的である。

昨年の作品では、夕日に照らされた水面が画面の三分の一を占め、オレンジを主とした暖色が画面を支配していた。これに対し本作では、雲の浮かぶ青空が画面の中心を成し、その下では瑞々しい山々のあいだを河川が流れている。

一方で共通するのは、人工物がアクセントとして機能する表情豊かな自然の肖像性と、モチーフの配置や色面構成が生み出す装飾性である。「まだら雲」や「うろこ雲」といった立夏を想起させる雲の形状と反復は、画面に装飾的なリズムを与えている。太い輪郭線によって大胆に分割された色面が示す水の流れや山々の連なりも、同様に装飾的効果を高めている。

このように、木版画の技法を活かしながら絵画性と装飾性を調和させている点に、本作の魅力があるといえるだろう。

（講評者　町田市立国際版画美術館 版画担当係長
藤村　拓也）

彫刻部門

風に向かう　　岩成　昭則（米子市）

３つの独立した造形が各々別個にその存在感を発揮しながら、次にはそれらが連動し合い一つの世界観を形成している。作品は大中小とサイズが異なり、それによってリズミカルな空間を出現させている。そのうちの２つは人間と覚しき形をしており、有機的な形態が直線的なエッジを伴いながらデフォルメされ構成されている。

作者は、一昨年の≪猫　阿吽像≫に続く県展賞受賞であるが、今回も独自の造形言語を駆使した高い完成度と独創性を有した作品となっており、安定したレベルの仕事を継続できる能力は高く評価されよう。≪風に向かう≫というタイトルは、揺らめくような３つの個体によって象徴的に表現され、その白い色彩と相まって清新なイメージを見るものに与えている。

今後も、いっそうその創造の可能性を深化させながら、新しいテーマに意欲的に取り組んでいってもらいたい。

（講評者　国立国際美術館 研究員　安來　正博）

工芸部門

経緯絣木綿着物（舞）　　田中　知里（倉吉市）

タテとヨコの絣で構成された静かな着物である。

長さ、巾の異なる三種類の繊細なかすりの重なりがとても面白い。

余分な技法を一切入れず、絣を際立たせているところに作者のセンスの良さが感じられ、藍の冴えた色が絣に味方してすっきりとした仕上がりになっている。

文様の配置など考える余地はあると思うが、美しさに変わりはない。

（講評者　山下　健）

工芸部門

埋没材造拭漆盛器　　本庄　靖男（湯梨浜町）

木工芸では、材料の木目を生かした木取りを行ない、轆轤を回転させ刃物を当てて成形する技法を挽物という。

この作品は挽物技法で作られており、かなりの大きさにもかかわらず薄づくりに挽いてあり、轆轤の巧みな技が遺憾なく発揮されている。その上、盛器の外側に10角の面取りと、内側にも同様に輪花のような曲面が施されていて、しっかりとした轆轤の技に加えて繊細な造形センスが感じられる。作品名の埋没材造りとは、長らく地中などに埋もれていた木材のことを指していて、神代欅造りのことではないかと思われる。

流れるような木目の模様を効果的に取り込むために、器のフォルムや大きさが決められており、作品から素材の扱いの確かさと造形のバランスのよさが感じ取れる。また、仕上げに拭き漆が施されたことで、落ち着いた風合いのなかに木目が浮かび上がり、県展賞にふさわしい格調の高い作品になっている。

（講評者　前田　昭博）

書道部門

幻影　　小谷　佐知子（鳥取市）

墨色が美しく、堂々とした風格を備え、見る者を惹きつける作品である。「幻」の太く重厚な線と、「影」の細く軽快な線との対比が豊かで、筆の動きに躍動感を感じられる。二文字それぞれの造形と線質に変化を持たせながら、空間をしっかりと捉え、統一感のある作品に仕上がっている。さらに、時間の経過とともに、大きな動きへと展開し、感情の高ぶりが、気持ちの昇華へとつながっていくようである。力強さと繊細さと併せ持ち、清々しい余韻を残す、実に見応えのある作品である

（講評者　言水　抱泉）

書道部門

過香積寺　　柴田　玉汀（米子市）

豊かな墨量によって重厚感を表現し、合わせてリズミカルに展開させた渇筆は爽やかで快い。

行の響き合いも清々しく、感性を生かした品格のある作品となっている。

（講評者　藤山　雅鳳）

書道部門

おもひ　　阿部　恵勝（境港市）

帖作品を懸命に「おもひ」を乗せて書作した姿が作品から感じとれる。

弁柄色の濃い染め紙に墨のねばりをうまくのせて行の高低、行間、墨量の変化を考え全体を良くまとめている。

渇筆部分の墨の出し方には光るものがある。

墨量のある行に少し柔らかさがプラスされゝば、さらに素晴らしい作となる。

（講評者　吉岡　芝香）

写真部門

蒼と輝き　　来間　空（米子市）

水面を境界として、透過、あるいは反射する光のヴァリエーションを見せる三点の「組み写真」による。水の屈折を通しながら指のふやけた表情までをも描写した上段の写真と、海面に現れた眩いばかりの光の反射と突堤に立つ素足の影を見せる下段。そして中段では、水に浮かぶ青い球体とその波紋、さらには画面全体に水面を透過した光の波紋を見せる。一見すると幾何学的抽象絵画にも見える中段におかれたこの写真こそが、「組み写真」を成功させている。

水中の手や逆光の中に立つ足に比べて、青い球体にはフォーカスが当てられ、その質感までもが描写される。その構図と組み写真の配置によって、観る者の視線を求心的に導く。フレアとゴーストと呼ばれた、光の反射の映り込みは、今日ではデジタル技術の普及と撮影後の工夫と操作によって重要な表現要素として置き換えられた。かつて、「光画」と呼ばれた写真は、デジタル技術による画像処理で再興されつつある。

（講評者　写真評論家　竹葉　丈）

写真部門

雪灯り　　山脇　賢治（倉吉市）

雪の夜、「日課」である散歩に取材した同作品は、よくあるペットの写真や、従来のネイチャー・フォトとは別種の感興を与える。飼い主の姿は漆黒の闇に埋もれ、愛犬を曳くリードとその手許だけが光の中で浮かび上がる。さらに、降りしきる雪の中でさえ、凛として佇む柴犬の姿には「愛犬家」ならずとも感動すら覚えよう。

この作品の優れたところは光の演出にある。愛犬の行く先を照らす懐中電灯とは別に、画面左側からの純側面光等、屋外での撮影であるにもかかわらず、計算されたライティングがこの作品の完成度を高めている。また、正面からとらえた視点の高さにより、雪が降りしきる冬の夜空を大きくとり、彼らが歩いてきた遥か彼方の街の明かりを点景として見せる構図には、静寂とともに郷愁すら感じさせる。過剰な画像処理や特異なモチーフでなくとも、日常生活の一コマに感動を見出す、絶えて久しいリアリズムの醍醐味と写真本来の魅力を充分に伝えてくれる。

（講評者　写真評論家　竹葉　丈）

写真部門

落陽　　北野　正（境港市）

デジタル技術の普及に伴い、今日の写真では記録性よりも表現が重視され、「絵作り」はより複雑さを増している。審査では、本作品の作画技法が注目された。壁面に映し出された自身の影を中心に据えながら、画面を二分する水平線が設定され、上部の影が鏡像として映り込む。画面下部左側には水の波紋が確認でき、その境界線が水面であることが暗示される。画面上部の半円形の図形は、左側では鋭角的な三角形を示し、あえて安定的なシンメトリー（左右対称）を崩している。

さらに、観る者の奥行きの感覚を攪乱するものが、画面中央、影の部分に透過、出現する反復された波紋であろう。影と水平線による、上下左右の四つのパートでは、鏡像や反転を展開しながら、丹念に「描きこみ」が施された。研磨された金属面を想わせる痕跡や水の波紋、光のフレア等、様々なイメージを重層的に重ねながら、実体を描写することなく、心象風景を現出することに成功している。

（講評者　写真評論家　竹葉　丈）

デザイン部門

ハンミョウに立ち止まる　　宮路　都羽（鳥取市）

植物と人体、そしてハンミョウという異なるモチーフを組み合わせ、生命のつながりと進むべき方向を示唆する独創的な作品である。脚から植物が生い茂り、足元にはハンミョウと思われる昆虫が配置される構成からは、ハンミョウの「道しるべ」という特性と、人生の進路を重ね合わせた寓意性が感じられる。花や葉を細部まで描き込んだ緻密な線描は高い造形力と技術力を示しており、画面上部の豊かな生命感と下部の大きな余白との対比も印象的である。さらに、透明な面と作品との間に生じる影が奥行きを生み、平面表現に立体的な広がりを与えている。緻密さと大胆な構成、静と動が調和した完成度の高い作品である。

（講評者　金沢美術工芸大学　教授　寺井　剛敏）

デザイン部門

ＡＩ依存症　　井澤　蒼介（伯耆町）

「Domination（支配・統治）」「Pure（純粋）」「Creativity（創造力・独創性）」「Humanity（人間性・思いやり）」という言葉を手掛かりに、AIと人間の関係を問いかける作品である。中央に据えた人間の顔に回路を思わせる線や機械的な装置を組み込み、脳や眼、心臓、両手、地球へとつながるイメージによって、AIと人間、さらに地球との関係を象徴的に表現している。AIが人間の思考や創造性、人間性に入り込み、やがて人間を支配する可能性を、大胆な構図と強烈な色彩で視覚化した点が印象的である。デジタル的な造形と絵画的な質感を融合させ、上部から「Earth」へと展開する画面構成も効果的である。現代社会におけるAIへの依存と、その先にある人間性の問題を強く意識させる、テーマ性と表現力に優れた作品である。

（講評者　金沢美術工芸大学　教授　寺井　剛敏）